

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

現在会員数 147名
8月地区別 295名
8月地区別 63名
年子山船大 (505名)

58年8月号 (133号)
発行 者 岳 萃
根 岸 岳 集
編 村 愛
中 村 愛 岳

吟詠芸術向上と大衆化への道拓く

木村 岳風 (4)

長野県本部長 竹ノ内岳宗
"松口月城氏との出会い"

漢詩の大家松口月城先生と出会ったのは、昭和十九年の十二月、福岡日日新聞社の講堂にて、戦勝祈願愛国詩吟大会が開催されたときで、木村先生は、松口先生に、「優しい文字を使った漢詩の作歌」を囑望し、その後、松口先生は、この方針で作詩し、その数一万有余。昭和五十一年展墓のとき、三十年振りて巡り逢われた松口先生は、墓前に土下座して懐旧の涙を流されていた。木村先生が編集した最初の詩吟集は、昭和八年夏、地藏寺の書院にこもって想を練った『註解興国朗吟詩集』の皇朝篇で、引き続き『漢土篇』が出版された。

いづれも桑文社の発売、一冊五十五銭という値段であった。記載は漢文主調で、吟符がなく、ただちに第二弾として、『皇漢名詩の吟じ方』を昭和十六年一月出版、大変な評判を呼び、洛陽の紙価を高らしめた。昭和二十七年五月十八日の発行にかかる『新愛吟詩歌集』(新書版)は、このころ

発行されていた月刊の大判『新朗吟テキスト』と同じく、仮名まじりの記載で、この企画の先鞭をつけたものであった。

(以下次号へ)

◇筆者竹ノ内岳宗先生は木村岳風先生の竹馬の友であり、この原稿は松井岳洋先生を通じて連載させていただきます。

○神奈川県本部 吟道大会

とき・9月11日(日)9時30分より

ところ・横浜市民ホール

○秋季 審査会について

とき・9月18日(日)10時開始(受付940分より)

ところ・逗子図書館ホール

審査料・600円：支部毎にまとめ

許証料・前同：支部毎にまとめ

(課題吟の指定について)

◇今回より受付票によって課題吟の指定を行います。行い十日前に各指導者に伝達いたします。

◇指定は符号を用いますので詳細は担当の先生に聞いて下さい。

◇受付票の年令は十月一日現在のものを正しく記入のこと。(書類審査の重要事項で公表いたしませんから正確に)

詩吟に想うこと

堀内支部B 一之瀬 汀風

十年一昔と言いますが、主人（英風）と私が入会いたしました約十年……月日のたつのは早いものです。其の間私共には色々な事がありました。一人息子を亡くし、又主人の父も亡くし、悲しい日々が続きました。もし詩吟をやっていたらなかつたならば、悲しみにのめり込んでいたであろう私達を、吟友の皆様のお力づけでどうやら乗り越えることができました。

詩を吟ずる時、その作者のことを思い、その時代を考えると、自然と詩の意味が解ってきて、その様に吟じなければいけないと思うのですが、仲々そのように吟じられませんか。唯々一生懸命やっている私、仕事の都合で思うようにお稽古にゆけない主人いくらやっても上達しない二人で、一日の仕事が終わってからよく話し合っております。返子に住む姉夫婦も出来なくて困る困ると言いながらも一生懸命やっているようです。これからも健康に気をつけつゝ、主人共々末長くつゞけたいと思っております。

人を愛し人に愛されてわが詩吟道を行く

吟道雑感

千葉 劔岳

昭和三十七・八年の頃かと思う。三井先生と、今は亡き義母竹村梅岳から、詩吟に入らないかと誘われたことがあった。私は当時某中央庁の中間管理職で、業務は極めて繁忙、毎日帰宅が十時過ぎ、一寸一杯やれば、午前様というわけで、とても詩吟どころではなかった。（今にしてみれば少々残念なところなきにしもあらず。）加えて詩吟には少々うらみ、つらみがあったから、心底から好きになれないものがあった。その理由は誠に単純なもので、旧陸軍で受けた体験からくる一種の拒否反応であった。時は昭和十四年代、まさに青春時代である。栄えある一つ星で甲府へ入営し、一ヶ月も経たずに北支戦線へ、来る日も来る日も討伐警備と明けくれた。入隊後三ヶ月もたらずに、敵弾の見舞をうけ、絶体絶命の境地にさらされたのである。その頃敵地からやや離れた警備区域内の営舎では、毎夕食後一時間程度、軍歌演習なる課目が実施された。この課目の中で、詩吟が大きいウエイトを占めていたのである。詩文は、兵の士気振興に最も影響力をもつ内容が選ばれた

ことは当然である。

九月十三夜陣中作・大楠公・金州城・爾靈山・蒙古来・白虎隊・本能寺・などであった。詩吟の指導は中隊の先任小隊長と助教がこれに当った。勿論、詩吟を正規に習ったものはいなかった。おそらく慰問のレコードなどで学習したのだろう。節調は毎回変る教官節である。作者名も例により読み上げるが、詳しいことは勿論説明はない。大声を発することに重点がおかれ、息つき自由、発音はナマッタ方がよしとされ、高さは今で言う六本か七本である。独吟など出来るものは育たないし、その必要もない。教官助教のみ独吟の資格ありで全く毎日大合吟の連続である。百名近い大合吟だから誰かが息抜きしても分らない。反対に時に大声出すものが認められるなど、今なら笑いものだが、当時大真面目なものだった。今頃よく言われるところの作者の気持ちになれなどとは一言も言わなかったし、もし言われてもなれようはずがない。吟などやっただことないのに毎日強制されて大声出させられたのだから、遠慮をして小声を出そうものなら上等兵が、後からニランでつき飛ばされるということになる。吟技などというものは指導する方も御存知ない。態度が一番ニラミがきつく、少々悪

くても張り倒されるか、いやな仕事に振り向けられる。

音程に至っては、まともって優雅に聞えるよりも、バラバラのどら声の方がよかつたのである。要はこの頃の詩吟は、敵地にあつて常に死を前にして、勇猛果敢の兵を育成するのに充分役立てられていたものであり、如何に立派に死なせるかに最大眼目があつたとみられる。

吟になじめないものにも、絶体強制して口を開かせたのである。吟の内容を理解させることなど、とんと関係はなかつた。吟の強弱、緩急などつける必要はなかつた。全部が強吟調だったからである。(今にして思えば、声の大きくなつたのはこのせいだろうと、つくづく考えている次第)。さて、こうした作戦の合間の詩吟も延べ六年に及んだわけである。二年目から教官側に廻ることになって、こうした指導も同じ要領でやってのけたのである。

丁度私が教官の頃、隣の部隊に伊藤長四郎先生が召集されて来て、特技として訓練は免除で幹部以下に吟の指導をされたと情報で伺つたが、私にはそのチャンスは与えられなかつた。また、祖宗範が北京の軍司令部に来られ慰問に廻られたと伺つたこともあつたが、私ら第一線作戦地までは廻ら

時間がなく、これまたチャンスを逃したことが思い出される。さて營舎の夜の軍歌演習は、教官助教を中心に円形を作り、指導の第一節を復唱して、そのあと何回も行進しながら合唱する。その間詩吟を入れて続行するが、これは一時行進を停止して円の中心に向つて各人半歩位両足開かせられ、腹に手をあてさせられたものである。上等兵は円の後方にいて、声の大小のみに注意しているという寸法である。吟ずる者に詩心などというものは考えられなかつたのではなからうか。ピンタの方がおそろしかつたというのが真実であろう。発音は正確だと優雅すぎるのか、問題にならなかつたし、方言、アクセントの標準外が大いにもてたのである。音階音程に至っては、指導者の方が外れていたのだからこれも問題はなかつた。吟法に至っては、これ又どうでもよかつたのであろう。態度は太く、どら声のもの程ほめられていたし、小声のものは常にブットバサレル運命にさらされていた。勿論芸術性などというものは敵性の概念に入っていたのである。

さて、こうした体験後生還して、昭和四十年代に入門することとなつた。これまた前記の拒否反応が改められる経緯があつたのである。或る会合で棄兇行の名吟を聞い

たその感動が機会である。以後旧軍で受けた詩吟アレルギーを心底から払拭し、正規に習うことに決意したのである。以来十九年、不肖未熟な門弟であるが、諸先生の指導のおかげで、吟の本當の姿が分るようになってきたつもりである。戦争中、吟は利用されたところもあつたが、吟道精神は不変のものだと考えている。

戦後平和とともに吟道の目的も明確に示されてきた。即ち氣を養うの道、人の生や氣なり、氣尽くれば死す、と教えている。長生きするためには不可欠のものとなつてきている。吟心も発声も発音も音程もまた態度も、どうあるべきか、細かに指導がなされ、今やどなたでも立派な吟道家になれる時代が来た。旧軍時代を省みて一方は悟りを開かせることに利用されたことに反感を感じることも、現代においては芸術の香り高い、しかも氣を養うの道として、老若男女を問わず、邦楽の一部として音感なども会得しながら精進できる毎日を、幸福だと考えざるを得ない今日此の頃である。



盧山瀑布を望む

其の一
其の二

松和支部 加藤 杉風

凡そ漢詩に按ずる方で、李白の此の痛快豪壯な詩に快哉を叫ばない人はあるまい。

日照香炉生紫煙 遙看瀑布掛長川

飛流直下三千尺 疑是銀河落九天

この詩は(其の二)で(其の一)は七言、二十二句の長詩であり、その冒頭には

西登香炉峯 南見瀑布水

挂流三百丈

……

これも素晴らしい詩である。三千尺がここでは三百丈となっている。三千尺(約千米)も三百丈(五四〇米)も詩の世界の表現かと思っていた。このあたりに関して少しく短見ではあるが調べてみる。漢詩の解釈と鑑賞事典の中で桜美林大学教授石川忠久教授は千米の滝などあるはずがないという。飛流直下三千尺は李白らしい豪快な表現であるといわれる。因に本邦華嚴滝は高さ九六・三米、巾十米である。ところで中国の旅(5)(昭和五十五年五月第一版講談社十中匡人民出版社)の58夏には五老峰中の双剣峯から流れ落ちる高さ百米の滝を李白の滝と称しているが肝心の香炉峯の記載がないのでこれは土台無理な説明である。香炉峯

は一体どこにあるのか。庐山山中にあることは確かな事である。(李白が五老峯に登った七言絶句はある) 庐山には九十九峯あり、東北から西南にのび、その長さ約二十九軒・巾十六軒の帯をいうのである。さて五十六年六月十二日朝日新聞夕刊に「白楽天の故地を行く」の一文で名勝庐山について次の様な記事がある。まずふもと秀峯という公園地帯から香炉峯の滝を眺める。飛流直下三千尺、という李白の詩は誇張ではない。本当に千米の高さから落ちていたと記載されている。がこの記事は誤りではないでしょう。か。(其の二)の冒頭に香炉峯に西より登り瀑布の水を南に見とあるので滝は香炉峯にあるのではなく、その南に面する山にあるということになっているのである。ところが更に六月十二日の「江南新色」の欄に南香炉峯の写真が小さいながら出ている。霧の庐山、左端の峯は李白の詩で名高い南香炉峯の見出しである。確かに左端に香炉らしい形の山が見える。そして右どりの山から白い一本の線が略垂直に落ちて見られる。これが飛流直下三千尺かと思われる。記者はしきりに香炉峯の滝とよんでいるが、記載の誤りではないかと思われる。ここには南香炉峯とあったが白楽天(白居易)の江州司馬と

なりし時の有名な詩「香炉峯下新に山居を卜し草堂初めて成る偶東壁に題す」の

遺愛寺鐘磬枕聽 香炉峯雪撥藤看

この詩の中の香炉峯は、大林寺の桃花の詩で有名な花徑公園近くの彼の草廬跡から見た北香炉峯である。つまり香炉峯は南北二つあったというわけである。

最近中国へ視察に行かれる方もかなり多く、この瀑布の荘観さを見られた方も多かと思いますが、もし御覧になられた方がございましたら御感想などは是非お知らせいただきたいと思います。夏向きに瀑布の事など短見を申しあげ恐縮いたします。

(訂正)

七月号合吟コンクール入賞者氏名の中三壁照山さんは都合上出られなくなり夏澄支部の高橋勢山さんが代って出吟されました。

(入金)

591 風戸八郎 葉山町一色七一―四八

(一色E) (電)〇四六八一七五―六八五三

592 長瀬ハナ 横須賀市林二―一五―一

(上原) (電)〇四六八一五七―一七七七

(退会)

89 高村芳風(桜山A) 537 池田喜山(堀内C)